

なしのひろばは

農業、貿易問題の現状分析と政策について議論が重ねられた。

中国が近代化の過程で抱えている自国の政策課題について、北京での国際会議で自由に討論する機会を提供してくれたのは、中国が如何に真剣に近代化に取り組んでいるかを明示するためだけではなく、会議参加者が中国の近代化の実態をより深くかつ正しく理解することにより、それぞれの国々の対中協力の在り方を真剣に考えて貰おうと願っていたからだと理解した。ある意味では、中国は五つの近代化に中国の将来をかけており、今回の国際会議は、それを円滑に達成せんがための対外環境整備の一助にするという位置づけがあったものと考えられる。

北京会議に対する中国側の期待もさることながら、アジア太平洋地域の新進国、開発途上国側の期待も大きなものがあった。最初は研究ブルジョアの一環としての国際会議という性格から二十名乃至三十名位の専門学会合を考えていたが、同開発センター加盟国からの参加希望が多く、公式の参加者

だけで中国以外から五十名という規模にふくれ上った。中国と外交関係が無いか、中断しているブルレーネイ、インドネシア、韓国、シンガポールからも大学、研究機関の専門家、政府関係者が参加したり、加盟国でない米国、カナダ、フランス、スイスからも専門家が公式参加したのも、国際機関主催の国際会議ならでのことであった。

北京会議の討論で最も印象的であったのは次の四点である。第一に、アジア太平洋地域の今後の成長潜在力に対して、中国研究者の観方が比較的楽観的であったこと。第二に、中国がその近代化のためには、若干の行過ぎを覚悟の上で、国内的には経済・政治体制の自由化、対外的には開放経済体制の整備が不可欠であると考え、これを推進していく決意が堅固であること。第三に、かかるダイナミックなアジア太平洋経済圏の維持発展の上で、日本の経済協力に対する中国を含めたこの地域の開発途上国の期待が非常に大きかったことである。最後に、東南アジア諸国連合(ASEAN)に属する国々か

らの参加者は、シンガポールを除いては、中国が経済技術の近代化の結果、これらASEAN諸国にとって強力な競争相手となり、脅威となると恐れていたことである。

この点、中国側はいずれも、西暦二千年の中国が一人当たり国民総生産で一十米ドル(現行価格)に達し、総額一兆二千億米ドルの市場規模を有する国民経済——一九八四年の日本経済の規模に匹敵——になるので、対中輸出の大幅な拡大が可能であり、経済相互依存度が高まるだろう、と強調していた。後発先進国と先発先進国、新興工業国と後発先進国、開発途上国と新興工業国との相互経済関係という一般論からすれば、工業化の追い上げ過程で、それぞれの比較優位部門の構成に変化が発生し、一方では競争関係の激化が、他方では相互補充関係の強化が観察されており、中国と東南アジア諸国との経済関係もこの一般論に類似すると考えるのは余りにも楽観的であろうか。

(一九八六・十二月十七日)

『アジア時報』一九八七年三月

緊急特集

胡耀邦総書記辞任事件



インタビュー

胡耀邦解任の背景と今後の中国

東京外国語大学教授

中嶋領雄氏に聞く

聞き手

アジア調査会常務理事・事務局長

島中茂男



1984年10月1日の国慶節のパレードに出席の（前列向って右から）鄧小平氏、胡耀邦総書記、趙紫陽首相

た。そこに今回の出来事の非常に重要な、深刻な意味があると思います。

つまり、私は、結局、「鄧小平体制」の内部分裂—その結果、胡耀邦がスケープゴート（いけにえの羊）にされたこととみて、これが、これにはかなり深い政治的背景があると思う。

—— 辞任後、いろいろな報道が出てきましたが…。

中嶋 事件が起こってから、徐々に今回の事態の概要が見えてきたような気がする。一つには、やはりかなり深刻なある種の権力の座をめぐる闘争、つまり、権力闘争というものが最後の段階では深刻になったと思う。しかし昨年の十二月上旬から学生の民主化要求デモが高揚し、中国社連が流動化してきて、それをどう対処するかということをめぐって、いろいろな意見が分かれる中で今回の事態が発生したとみていいわけです。

そして、十二月三十日の党中央の重要会議、さらに一月初旬の重要会議。最終的には胡耀邦辞任を決めた十六日の会議でも、大分激しい両者のやりとりがあって、その結果、胡耀邦がいわば失脚——当面は総書記辞任というけれども——に追い込まれたように、激しい角逐があったと見られます。

そうすると、やはりこれは、鄧小平体制そのものがかなり深刻な政治的危機に陥っていたのではないか。そうした政治的危機に陥っていたがゆえに、内輪のもめごと、角逐



中嶋 嶺雄（なかじま みねお）氏
昭和11年(1936年)松本市生まれ、同35年東京外語大中国科卒業、東大大学院(国際関係論)修了。社会学博士。現在東京外語大教授。この間外務省特別研究員(在香港)、オーストラリア国立大学客員教授、パリ政治学院客員教授など歴任。文革以来の中国評論を集めた「北京烈烈」で81年度サントリー学芸賞受賞、ほかに著書は「現代中国論」「中ソ対立と現代中国」「香港 移りゆく都市国家」など多数。

衝撃的な解任事件

—— 世界をびっくりさせた胡耀邦総書記の辞任事件はなぜ起こったのでしょうか。実質的には「解任」または「失脚」と言ってもよいと思いますが。

中嶋 今回の胡耀邦解任は、ある意味でドラマチックであったし、非常に衝撃的でした。単なる党中央の権力闘争ではなくて、昨年の十二月初旬から起こった中国の民主化要求のデモという、一種の社会的流動化状況を背景にして今度の事件が起こっているからです。

鄧小平体制の内部分裂

—— 一体どうしてこんな事態に至ったのかということが多くの方々の一番関心の的ですが…。

中嶋 これまで「鄧小平——胡耀邦体制」といわれるように、鄧・胡両者はまさに「車の両輪」であるかのように中国の政治を担ってきた。現に人脈からいっても胡耀邦はまさに鄧小平直系。一九八一年の中国共産党の十一期六中全会で胡が華国鋒に代わって党主席となり、八二年の十二回党大会で総書記として最高権力に就いた。いずれも鄧小平のバックアップがあったからだ。

ところが、思わぬことにこの両者の間に亀裂が起こる。最終的には鄧小平が胡耀邦を切るという形で事態が収拾さ

が、ある意味では醜悪というか、深刻なものになってきたというふうに考えられるわけです。

事件に至る政治的背景

経済改革の行き過ぎが批判された

——では事件の背景を分析していただきたいのです。

中嶋 今回の事件に至る背景を見ると、どうしても、中国の政治過程に照らして考えてみなければならぬ。

まず、「毛沢東体制」を脱却する中で、華国鋒に代えて胡耀邦を後継者に決めたというプロセスはよかったし、誰も疑う余地はなかった。鄧小平も盛んに胡耀邦を持ち上げていた。それで、鄧小平——胡耀邦体制の下で、特に八二年の十二回党大会以来、いわゆる経済改革を中心とする、そして対外開放を中心とする、いわば改革路線に乗り出した。

ところが、改革はどうみても急ぎ過ぎ、行き過ぎであって、この事態はむしろ鄧小平自身にも責任があるし、また、鄧小平自身がそう仕向けたわけなんです。

しかしながら、うまくいっているときはいいが、うまくいなくなると、たちどころに党内から批判が出てくる。対外開放にしても、特に日本との関係がこの場合重要で

が、開放政策だということで日本からは大量に物を買おうとして、その結果、たちどころに外貨が不足してしまった。それから、中国社会は毛沢東時代の長い試練を経てきているわけですが、それを全く一八〇度転換したために、かつての社会主義的な枠組が崩れかけた半面、非常に無原則的な風潮が至るところに出てきて、拜金主義、不正の風があちこちにはびこってきた。

「改革派」に対する「保守派」「原則派」の抵抗

——この状況下では当然党内から批判が起こりますね。

中嶋 この党内の批判が、明確な輪郭を描いたのは八五年九月の党全国代表会議。この会議についてはアジア調査会の講演会（アジア時報昭和六十年一月号）に掲載）で私も言及しています。それは、明らかに改革派に対する保守派の抵抗が陳雲（政治局員）を中心として非常に強かったというを示しているわけで、特に大会の最終日は、



陳雲氏

鄧小平と陳雲の全く一八〇度違った方向の発言をし、最高リーダーたちの間に大きな「亀裂」ができた。片や「改革派」。片や「保守派」。ところで、「保守派」

鄧小平と胡耀邦の衝突

——そして、鄧・胡の対立となるわけですか。

中嶋 昨年九月の六中全会で、実は鄧小平と胡耀邦が最初にぶつかった。しかもそれは、鄧小平の意向を越えて、もっと改革を進めようとしていた胡耀邦が浮き上がった。そして、なんと全く両者の間がしっくりしなくなった。胡耀邦としても、もう七十歳代だから、実際には彼もイスをめぐっていろいろのことを言うのは無理はない。

胡耀邦は総書記。つまりソ連共産党でいえばゴルバチョフの地位で、書記長なんです。にもかかわらず、いつも顧問委員会主任の鄧小平が後ろに控えているわけだから、それは当然あり得ることだと思ふ。胡耀邦としては、鄧小平はもうやめてくれ。自分が鄧小平の地位（顧問委員会主任）に就くんだといったという報道があったが、これはかなり信ぴょう性のある情報だと思う。

学生デモを理解した胡耀邦の「誤算」

中嶋 この背景を引きずっている中で、昨年十二月五日から学生デモが起こってきた。

中国の学生運動は、やはり政治過程との関連を抜きに考えられない。しかも真先に、安徽省の合肥市で起こったということが印象的だ。合肥市は、ある意味では開放政策の

モデル地区のような感じもあった。またそこにある科学技術大学は非常に進取の気風に富んだ、中国の理工系の大学としては清華大学と競う、あるいはそれ以上のいわばブレステージを持ち始めている大学だ。

私も、その学者からの手紙をもらったが、むしろ私が日本で言っていると同じようなことを主張している。また私の論文などに非常に共感している人がいる。その副学長が方勵之（今回の事件で党から除名）であったわけだ。こういうところから起こってきている。

それに対して鄧小平は、当初は改革派だったにもかかわらず、かなりそれにブレーキをかける方向に徐々に変化してきたということに対する知識人や学生のいらだちがあった、そのことを察知した中国科学技術大学の学生たち——それは、かなり先進的な学生グループ——からデモが起きているわけです。

こうなると、胡耀邦はこのデモについてはむしろバックアップしたいという気持ちがあったんじゃないか。そして胡耀邦自身も当初デモに関しては、かなり「それ行け！」という立場であったようだ。つまり、学生デモは改革を進めるための有利な武器になるんだというような思惑、あるいは、利用できる思惑があったと思うのです。そこに胡耀邦の「誤算」があったんじゃないか。

反体制運動にエスカレート

——それが一部では反体制運動までに行ってしまったわけですか。

中嶋 そうです。

それは当然、中国共産党の一党独裁体制に対する批判ということになっていくわけで、いわば反体制運動に転化していった。火をつければあちこちに燃え上がるような状況があったから、ワーストと全国に学生運動が拡大し、燃え盛り、そして次第に要求がエスカレートして、保守派つまり原則派と改革派の対立を超えて、中国共産党の存立、あるいは社会主義体制存立の基盤をも脅やかすように要求がラジカルになっていった。これが昨年十二月中旬から下旬の段階だと思ふ。

この段階に至って、鄧小平としては絶対容認できないという立場になり、そして党中央は非常に体制的危機を感じた。危機を感じる中でどういう問題が出てきたかというと、いわゆる原則派の人たちは「それみたことか」という批判を非常に強くしていったと思うのです。

たとえば、鄧力群というイデオロギー上原則的・保守的な人だといわれる人たちの発言であるとか、中日友好協会の会長もやった王震（顧問・副主任）、陳丕顯——かつて上海で盛んに批判された実権派——というような人たちの発

学生たちの日常的欲求不満

中嶋 というのは、胡耀邦は自分の配下に胡啓立とか王兆国とか、全部共産主義青年団出身の、いわば「胡耀邦グループ」というものを率いていた。これらの人たちは学生運動とかなり関連がある。たとえば、胡啓立は昨年九月、上海で非常に改革に積極的な講演をやり、「ブルジョア的民主も、社会主義的民主も、民主に違いはないんだ」というようなことまで言っている。これはまさに学生たちと同じレベルで主張していたことであって、そうなりますと、学生たちもそれに勇気づけられ、同時に改革派に期待しようという気持ちがあったかも知れない。

ところが、今の中国の学生たちにはものすごくあちこちに日常的な欲求不満が高まっている。日本やアメリカから帰った留学生には割合にいい幹部の子弟が多いために、外部世界の情報やニュースもたくさん入ってきている。ということになると、単に原則派と改革派との対立で原則派を



批判するということを超えて、今日の中国社会の様々な立不自由とか、様々な抑圧とか、啓そういうものに対する欲求不満、胡満になってゆくわけです。

言をみると、学生たちの動きに対して危機感を感じて、これを押さえつけるという方向がずっと出てきた。

改革派内部の権力闘争に転化

中嶋 こうした状況の中で、鄧小平——胡耀邦体制の、すでに芽があった内部分裂がはつきりしてきたと思う。そこで十二月三十日、学生運動の対処の仕方をめぐるも鄧小平が胡耀邦を叱責した。しかし、まだここでは決着がつかなかったようなんです。一月にずれ込んで、その間胡耀邦は行方不明といわれるような状況で、どこへ行ったかというようなことがあって、一月十六日の会議で、最後の彼の辞任が満場一致で決まった。しかしながら、胡耀邦は最後まで抵抗したらしいというところがみえるわけです。

こう見ると、最終的には、原則派と改革派の路線闘争が転じて、今度は改革派内部で分裂が起こって、学生デモの責任をめぐって亀裂が起これ、胡耀邦を実質解任する結果になった。全体に鄧小平改革がうまくいってればこんなことは起こらなかった。うまくいかなかった、しかも保守派なり原則派なりの批判や攻勢に守勢になってくると、責任問題をめぐって内部が分裂するということはよくあります。こういうパターンを今回の中国はとったんじゃないか。以上が、今回の事件の政治的過程と背景だと思ふ。

軍は表面に出ず

——ところで軍の動向はどうでしたか。

中嶋 軍の動向についてはいろいろの説がありますが、今の政治局の中には、軍の代表はほとんど入っていない。政治局員候補一人ぐらいで。しかしそこは一つの救いだとおもう。軍が決定的に最後に力行使した林彪時代や、毛沢東時代と違っていますね。

その意味では、中国政治のシベリアン・コントロールというものはかなり進みつつあるし、人民解放軍は、かつて中国社会の中で持っていたステータスは、現になくなっていきます。昔は人民解放軍になると、肩をいからせていたし、人気の的だったのですけれども、今は人民解放軍は凋落しているそうですね。かつて軍がのさばり過ぎたという反動だと思っています。

そして、鄧小平は、中央軍事委員会の主任で、軍を一応握っているわけですからね。そういう意味で今回、あまり軍が表に出ていない。

ただ、軍幹部はもちろん、軍人たちも、今のような開放政策には批判的であり、不満があると思いますよ。彼らは、もともと毛沢東に育てられた人たちですし、開放政策の恩恵をこうも受けていない。そういう意味では、あんまり西側といちゃつくなど考えていたのではないかと思いま

とが起こっているということのマイナスの影響は、内外ともに大きい。

こうなると、開放政策だとか自由化といっても、どこまでやっていいのか、みんなびびってしまいますし、日本の経済界だって、これで中国との貿易やっていけるだろうかとみんな不安に思っている。それから香港の人たち——特に華僑——もそうだと思います。開放政策の目玉は経済特別区や合弁企業ですが、中国は盛んに日本にきて合弁企業にどんどん投資してくれといっていたが、こうなるとそんなに簡単に投資することできないんじゃないか。

そういう意味では、今回の事件は社会的、国際的な影響からすれば非常に大きい。また「ポスト鄧小平」への不安もすごくかきたっている。鄧小平がいてさえもこうであった。果たして鄧小平がいなくなればどうなるかということを考えて、今回の事件は大きな出来事だ。

繰り返えされる同じパターン

——北京からの報道によると、鄧小平は胡耀邦の犯した過ちとして、①自派の勢力拡大②鄧主任の早期引退を促すための学生運動放任③西側賛美、外国崇拝——の三点を厳しく批判。また趙首相も、胡耀邦は三中全会の決定を長期間妨害したとして、就任以来の業績のほとんどを否定した、との徹底した批判をしたといわれますが。

す。

天安門事件に匹敵する影響力の大きさ

——今度の事件のウェイトは戦後の中国政治史の中で、天安門事件、林彪事件などの事件に匹敵しますか。

中嶋 天安門事件は、毛沢東体制を下から崩していった事件でした。民衆運動としては非常に大きかったわけですが、今回の事件は非毛沢東化を進めて転換していったプロセスの中で起こった事件としてはきわめて大きい事件だ。つまり、文化大革命の激動の過程の中で起こった最後の反逆が天安門事件だったけれども、今回の場合は、一つの正常なプロセスが始まった、固まったとみられるところで内部が混乱分裂してガタガタになったということです。事件としては天安門事件の方が政治的意味は大きいと思うが、影響力とか今後の中国に与える不安とか、あるいは、香港に与える不安、動揺などを考えると、非常に大きいんじゃないでしょうか。



彭真氏

しかも今回は、鄧小平ワンマン体制下起こったわけで、「もう中国は再び政治の混乱を繰り返さない」と彼らも言い、外部世界も大方はそう信じてきた中でこういうこ

中嶋 これが中国の政治パターンなんです。ひとたび批判されると急激に悪者になってしまふ。だから、これから始まるであろう胡耀邦批判というものも、そのままでちょっと受け入れ難い。あるいは、もしそうであれば、なぜそんなに悪い人物を権力の中核、後継者に据えたかという鄧小平自身の責任も問われなければならない。これは同じパターンなんです。毛沢東時代も、後に林彪を盛んに批判したが、そんな裏切り者の林彪をなぜ後継者に指名したかということは問われなかった。だから、私が今回の中国の政治ドラマを見ていて思うことは、中国は政治的な悪循環から絶ち切れていない。また同じことを繰り返しているということです。

鄧小平の最近の状況をみますと、『人民日報』の論文を読んでも、最後はいつも『鄧小平文選』をもっている。かつて必ず『毛沢東語録』や『毛沢東選集』をもってきて、お墨付きを得て、論文に権威づけをしたと同じように、今みんな鄧小平です。だから鄧小平の責任も大きいと思うんです。

彼は十二回党大会で顧問委員会というものを作って、自分はその主任に収まるということで第一線から引退したはずなんです。そして党中央は胡耀邦がやってゆくというふうにしたにもかかわらず、鄧小平の権威が必要なのかも知れないが、彼自身がすべてを演出し、牛耳っているという

ところに、やっぱりカリスマ的、皇帝型権力という中国政治の伝統を引きずっている面がある。なにしろ、顧問が最高権力者をやめさせたわけですから。

このことは、将来的に考えると、鄧小平以後は非常に不安になるわけで、こんなやり方が中国にとってよかったかどうかということがあると思います。

社会主義国の「自由」と「民主」とは

—— 今度の事件の核心は、社会主義の旗の下で、資本主義国ばりの経済発展を続けようとするれば、いずれ民主、自由という問題にぶつかって、いろんな矛盾を引き起こすということだ——といわれますが、このへんをどう考えられますか。

中嶋 民主主義とか、自由という問題を社会主義においてはどういうふうな位置づけていくか、これは大問題です。それがブルジョアの自由で、それが社会主義的自由かといわれても、これを区別することは難しいと思う。

たとえば、中国の一人っ子政策。これは今の中国の状況からすれば絶対にそれを守っていかざるを得ない。だけど、これを裏から見ると、子供を何人つくるかは基本的人権です。この基本的人権というか、子供の数は親が決めることだというのは普遍的な原理であるべきであって、社会主義的な原理と資本主義的な原理とどちらが良いか悪いか

という問題ではない。

それは、根本的には社会主義というものが人間の解放ということを掲げていながら、やはり人間としての普遍的な原理に社会主義の体制が抵触するという根本的な矛盾があるわけで、この辺に敏感な学生たちや先進的な知識人が気づき始めている。これが一番こわいところだと思う。

知識人は抑圧される

—— 知識層への動きはどうなるでしょうか。

中嶋 やっぱり、百家争鳴とか、社会主義の根本的な問題があり、言論の自由を許せば、それは党の独裁体制に響くという問題が常にありますから、その根本矛盾がある限り、知識人は抑圧せざるを得ない。知識人は、やっぱりそういう普遍的な原理を求めますからね。

私は昨年十二月、中国に行ったとき、かなり率直に、アジア調査会で報告するのと同じようなことを北京の人民大会堂で報告したら「よくぞ本音を言ってくれた」いわれまして。



石 橋

私は「社会主義は近代化に向かない」と言っただけです。そうしたら、むしろ「よくぞ本音を言ってくれた」と手を握ってくれた知識人が何人か

いました。恐らく、こういう人たちは、今後は「冬の季節」を迎えるだろうと思います。これは、公開の席で言ったんです。そこは知識人のシンポジウムでしたから。そこまで自由な雰囲気は一部に流れていたんです。今度はまた逆戻りです。

今後中国は揺れ動く

中嶋 こういう根本問題を中国が抱えており、当面、社会主義体制を旗印にしていくなわけですから、この根本矛盾はなら解決されないし、理論的にも説明されていない。ここに問題があって、今後中国はこの問題をめぐってゆれ動くと思う。緩めては引き締め、緩めては引き締めていかざるを得ないという気がします。

それにしても、改革派はなぜ経済改革のスピードを上げたのか。胡耀邦自身もスピードアップを言っていたけれども、鄧小平自身が非常に急いだと思う。一つには、鄧小平は健康だといえ、八十二歳です。この高齢の中で、自分が生きているうちに中国の改革を固めたいというふうにあせったと思うんです。

また中国が目ざした今世紀末までに一人当たりGNP一千ドルという数字自体も決して欲ばった数字ではない。しかし、世界はもっともっと発展しているために急がなければいけない。

それから、毛沢東的なものはまだ中国社会にいろいろ残っている。そういうものがこわかったと思うんです。自分が死んだ後も絶対にひっくり返らないような体制を作りたいというあせりが全般的に見えた。そのあせりのために着実な「穏歩前進」ではなく、急激に、極端にいくこうとしてヒズミが出てきたというところにおおきな原因があったとおもう。

今後の中国はどうなるか

首脳人事をめぐる角逐も

—— それでは、中国は今後どう動くのか、を予測していただきたい。まず、中国首脳的人事はどうなるでしょうか。

中嶋 胡耀邦のあとは、一応暫定的に趙紫陽が総書記代理ということになっている。しかし、一体いつまで代理なのか。恐らくこの秋に予定されている十三回党大会ですが、中国の政治のしきたりからいうと、「代理」というのは正式な手続きを経ないから「代理」。次の大会で中央委員会、中央政治局を選出して正式な手続きを経れば「代理」が取れる。それまでは「代理」である。

そうすると、一般的に考えれば、このまま十三回党大会まで代理であって、十三回党大会で新しい体制を選出をす

るとともに正式に彼が総書記になるという線が一応は考えられる。ただ、胡耀邦はなんといっても共産主義青年団その他の人脈もあつたし、党内の基盤があつた。その基盤をあまり持っているとは思われない趙紫陽が、つまり彼はラインに立つ人ではなくて、スタッフの総大将みたいな感じですから、首相としてはいいけれども、党の政策決定のラインとして活動できるかという点、どうも私はそこになりに疑問がある。

しかし、どんな人でもある地位に就くと、それなりに基盤も広がってくるし、人脈もできてくるから、その点で、確かに彼が中国共産党の総書記になっていくということも考えないわけではないと思いますけれども、しかしながらまだそれは確定したとはいえないと私は思います。したがって、今後この問題をめぐってさらにいろいろな角逐が起るんじゃないか。

李鵬が総書記の最有力候補

中嶋 私がその他の人の中でみると、一人の有力な候補は李鵬だと思う。李鵬は現在政治局員であり副首相だが、もともとテクノクラート出身で、ソ連留学組でこのところ非常にあちこちに活躍をしている。彼はどちらかというと陳雲に近い原則派だと私は見ている。一部には彼を改革派と見ている向きもあるが、いずれにしてもそれほど旗色鮮明

にしていないところがあって、ある程度の幅もある。胡耀邦グループの中では、胡啓立が最も近かったといわれる。彼はまさに胡耀邦の跡を襲う五十代の政治局員で、中央常務書記にあつたけれども、今度の一連の事件をみると、まさに胡啓立に一番問題があつたと思われるくらい、彼は改革をおおっていたわけですから、胡啓立は今後あぶなくなってくる。

そうすると、もう一人喬石という副首相が注目されるが、彼もやはり共産主義青年団グループで、胡耀邦グループです。

こういう胡啓立、喬石、王兆國、あるいは外務大臣をやっている吳學謙——ちよつと違うかも知れませんが——、こういうかつての共産主義青年団グループの人たちが、今後胡耀邦批判がますます進んで、責任を追求されますから、落っこつてくるということになると、あと残っているリーダーでは、万里副首相がいる。だが万里はどつちかというところと首相タイプの人です。それから一月に來日した田紀雲副首相。彼も首相タイプの人です。



李鵬氏

これらの人たちが果たして党のリーダーたりうるか。私はどうも李鵬ではないかという気がするんですけども、

この辺はまだまだ確定し難いとみていいのではないかとおもいます。

こういう人事をめぐつてもはつきりしない。つまり鄧小平自身が、自分の策き上げた人事工作を自ら捨て去つていったわけですから、まだまだ中国は当分政治的には不安定が続くと思うし、ポスト鄧小平ということではなおさら不安定が続く。

胡耀邦はすぐ全面的に失脚しないにしても、よほど権力闘争をまた盛り返して、鄧小平以後、鄧小平批判の先頭に立つことができれば別ですけれども、今のまま行くと、ちよつと無理だとおもいますね。

問題は、胡耀邦を解任に追い込んで彼を批判しても、中国が抱えている根本的な矛盾——民主とか自由の問題とか、開放政策をどこまでやるべきなのかとか——は何ら解決してないことです。ただそのことをめぐって内輪もめが起こつて、重要な人物を切ってしまったということであつて、ここに今日の中国、あるいは今後の中国の政治的な難しさがあるのではないのでしょうか。

経済開放は引き締められる

——次に、中国が目ざした開放経済や政治改革はどうなるでしょうか。

中嶋 中国は口を開けば、開放体制ないし近代化路線は

変わらないと言うが、確かにひとたびセキを切つて流れ出した大河はせき止めることはできないと私も思います。しかし、これまでのように、明るい感じで大きな水流として流れ始めることはもうできなくて、あちこちによどみができたり、蛇行が繰り返されたりするのではないのでしょうか。開放経済は当分、引き締め基調でいかなるを得ないのではないかと。

また、地方分権だとか、個人企業への権力の委譲だとか、株式制度の導入だとかそういうようなことがいろいろやられてきたわけだが、今後はどこまでやったらいのか。ちよつとやれば批判されるんじゃないかということになる。

第一、知識人たちの活動は非常に停滞するんのではないだろうか。そして政治改革ないしは民主化という課題は大幅に遅れると思います。ということになりますと、近代化への道というのはかなり遠回りせざるを得ないと思います。

多い日中貿易のトラブル

——次に、日本との関係はどうなるのでしょうか。

中嶋 私は、今、日中間の企業のトラブル処理に当たる委員会の責任者をやらされているが、いろいろ調べてみると、予想外にトラブルが多い。



万里氏

各企業は、こういう問題は表に出していい。出すと、企業のイメージが傷ついたり、今後の取引に響くというので、みんな泣き寝入りしているのですけれども、そういうことをいろいろ調査してみると、実にトラブルが多い。

今、日中貿易だけでも二千億円ぐらいの商談のトラブルがあちこちに起こっておりましてね、それをどう処理するのかで頭が一ぱいのところへもってきて、今度こんな事態になっちゃった。

その理由は、中国側に責任があるというケースが多い。たとえば、中国側のある会社が日本にエビを買って下さいと、サンプルを持ってきたというのです。日本の大手商社は、それを買うようにして、全部卸売業者など全部に手配して、出荷するようにして待っていたところ、品物が来なかった。

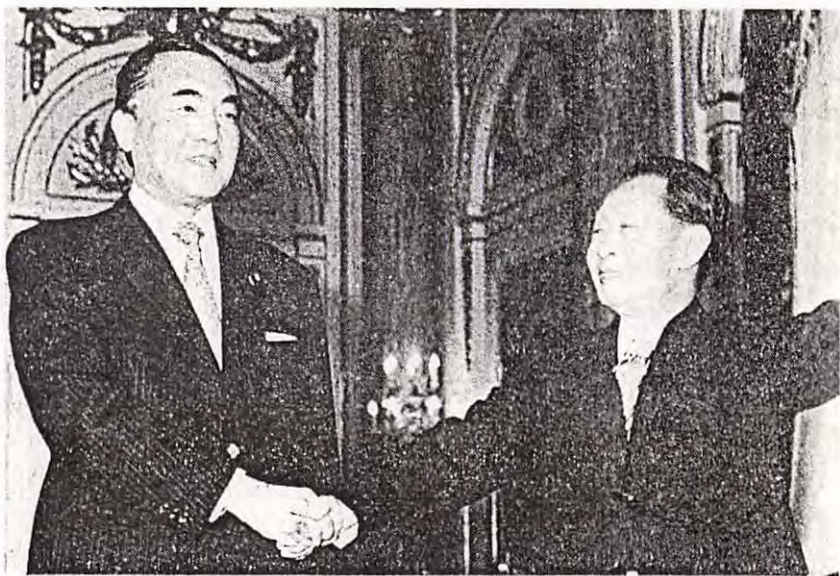
それで、調べに行ったところが、権限を移すというのは、代理業をさせるということであって、末端機構が日本の商社と取引していいというようなことは中央は絶対に言っていない——というようなことを今度は言い出して、最後にダメだったというようなことです。

ですから、権限を委譲されたとおもった公司自身がやっぱり誤解していたということ。それに上からおさえつけられたらそれっきりでしょう。エビぐらいのことで済んだから大したことはないのだが。もっと大きないろいろのトラブルがありましてね。

こういうような具体的ケースをいろいろ検討してみると、結局中国は日本と取引する原則に関して非常にルール違反が多いですね。ルール違反が多いことを今度は日本側が追求すると、また例の教科書問題のようになって「かつて日本は何をしたか」ということがくすぶってくる。そうすると、日本側はいつい黙っちゃうというよな、いわゆるウェットな対応をしてきましたね。そこに問題があるし、私は、日中関係は「異母兄弟」の関係だから、うまく行っているときはいいけれども、ひとたび金銭上、経済上のことでいさかいが起きると、他人以上にとくほぐし難いことから、そこはある一定の距離をおいて、冷静にお付き合いをすべきだということを申し上げてきました。

日本側も中国のスピードを崩した

そればかりではなしに、日本政府も財界も中国は鄧小平——胡耀邦体制で磐石である。日中友好は子々孫々である、というような意見が非常に強くて、そして「それ行け中国



昭和58年11月の日本訪問のとき中曾根首相との会談に臨む胡耀邦氏（左）



「とばかりウィツと殺到したでしよう。やっぱりこれの雲反動が出てきますね。」

紀 極言すればは、日本が中国にあんなに殺到したことが、中国の開放体制のスピードを崩してしまい、そしてトラブルの原因になったと言えなくはないのです。

それほどこまでに日本の影響力は大きいと思います。そこまで日本というものは、中国社会の発展にビルト・インされているだけに、当面中国は日本に対して厳しい姿勢に出してくるでしょう。

中曾根首相の「明治維新演説」

中嶋 特に中曾根政権は、胡耀邦と個人的な親密感で日中関係をつくろうとした。中曾根首相自身は、胡耀邦を家族ぐるみの付き合いをしているということをしきりに自慢されていましたし、中曾根政権下で出来た「日中二十一世紀委員会」のメンバーを見ると、いつも出て来たのは胡耀邦であり、胡啓立であり、王兆国である。全部胡耀邦グループなんです。

ですから、私は「君子の交わりは淡きこと水の如し」と昔から言うように、君子たるものは、やはりある一定の距

離を保ったようなお付き合いすべきであって、「小人の交わりは甘きこと醴(れい)の如し」、甘酒のように甘い……これは孔子の言葉ですが、小人ならいいんですけれども、宰相たるものは、もっと君子の交わりをしてほしかったのですけれども、そういうことで展開してきた。

そこへもってきて中曽根首相は昨年十一月月上旬に訪中し、日中青年交流センターの定礎式に行つて演説をしました。胡耀邦の目の前で「日米は明治維新のときは、改革派が保守派をやつて、日本の近代化に成功したんだ」というようなことを言つたわけですよ。それは中曽根首相らしいいかにもひと言多い発言で、それもアジア演説のごとき口調で青年たちに言った。

だけど、それを聞いていた胡耀邦は「あつ、困ったことを言ってくれる」と思つていたと思うのですよ。もうすでに党内対立があつたのですから、迷惑だつたと思うのです。しかも、それを聞いていた保守派の人たちは「何だ」と胡耀邦に言つただろうし、中曽根に対しては、むしろ立腹したんじゃないか。ただで



氏 さん 胡耀邦が日本の中曽根と
国 親しいとか、ちよつと日本に
兆 向き過ぎていたことが批判の
王 材料になつていた。

日中友好の三千人の日本青

い方向が出たと思つてゐるんじゃないでしょうか。その意味では、中ソ関係は、今後さらに進展するのではないでし

年を中国に招待したことも、「行き過ぎだ」と言われたし、今のような形で「日中二十一世紀委員会」なんか作つて、日本ばかり向いてゐるということは、「今日の汪兆銘である」というような批判さえ一部に出ていたわけですから。こういうことを考えると、今後は中曽根政権に対しては、かなり厳しく出てくるのではないのでしょうか。

アメリカへの影響と中ソ関係

——アメリカへの影響はどうでしょうか。

中 嶋 私は今後、全般的に、日本に対しても同時にアメリカに対しても、つまり、西側全体にかなり厳しくなってくるであろう。国内的にはより原則的なマルクス・レーニン主義の方向に回帰して行かざるを得ないわけだから、アメリカも、たとえば、中国に軍事的にテコ入れをしてソ連に当たらせようというような戦略はこれで挫折したと思ひますね。

そのへんは、鄧小平自身が、なかなかたくみにカジを取ろうとしてゐるわけで、彼自身が自分を守るためにも、今後はむしろ保守派と妥協して、ソ連や東欧の方を向いて行く。むしろ、ソ連のゴルバチョフ書記長にとっては大変い

ようか。(インタビュは昭和六十二年一月二十日)

(文中敬称略)



伊 藤 喜久蔵

(愛知大学講師)

一、急転回した政治の舞台

一月十六日夜、北京放送は突如、胡耀邦党総書記の辞任を伝えた。同日の党中央政治局拡大会議で、胡総書記が「党の集団指導原則に違反し、重大な政治原則問題で誤りを犯したことを反省して、総書記の職務辞任を請求し、全会一致で認められた」というのである。ただし、政治局常務委員のポストは残った。後任は趙紫陽首相が総書記代行に一致して推薦された。

まったく予想外な発展だった。しかし、中国指導部内の胡耀邦批判は、昨年後半には国内関係者の間で周知のことだったらしい。中曽根首相が訪中した十一月、たまたま中国ではネズミ取り運動が実施されていたが、同行した日本人記者に対して中国側案内人が「このネズミ取りは一体どんなネズミを取るんでしょうね」と語りかけたという。胡耀邦が次第に追い詰められていたことを物語るものだろう。

また、百家争鳴が強調されていた昨春、来日した中国

アジア時報

1987年2,3月 通巻第202号目次

■時評 円高と水平分業	渡辺 利夫 2
■話の広場	
米大統領の病氣	宇佐美 滋 4
衰亡の感覚	齊藤 明 5
発想の転換	相馬 雪香 7
「走向」二〇〇〇年の亞太経済北京会議」に出席して	広野 良吉 9
■緊急特報・胡耀邦総書記辞任事件	
①胡耀邦解任の背景と今後の中国	中嶋 嶺雄 11
②それは民主化要求の学生デモ事件から起こった	伊藤喜久蔵 27
■特派員の目	
〔北 京〕北京学生デモで胡耀邦氏が詰め腹	34
〔香 港〕九七年返還への不安	27
〔ソ ウ ル〕金日成主席死亡騒ぎの「ナゾ」	
〔ジャカルタ〕シンガポールの新時代	
〔ニューデリー〕難民問題に悩むパキスタン	
〔ワシントン〕「紛争対位法」の季節?	
〔モスクワ〕進む「第二の雪融け」	
〔ロンドン〕「エイズ・ショック」と選挙ムード	
■北京特派員として見た十億人の中国	山本 展男 43
■新たなスタート台に立った「東方外交」	大須賀瑞夫 60
■「イラン疑惑」展望と波紋	小西 昭之 65
■ベトナム再生への試練	荒巻 裕 71
■この人リグエン・パン・リン・ベトナム党書記長	77
アジアと日本	80
アジア調だより	78

毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋1-1
振替東京4-56534

絶賛
発売中!

文化庁監修

国宝
全15巻
別冊・国宝便覧

世界に誇る国宝全一〇三三件を
今ここに収録した「美の金字塔」

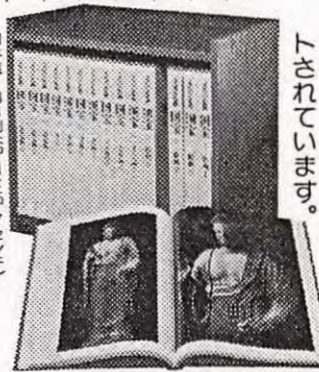
1 絵画 I	仏画/祖師図
2 絵画 II	大相絵/肖像画
3 絵画 III	水墨画/近世絵画/障子画
4 彫刻 I	仏像/肉像/飛鳥/奈良/平安
5 彫刻 II	仏像/肉像/神像/平安/鎌倉
6 工芸品 I	金工/漆工
7 工芸品 II	陶磁/漆器/古道具/和服/その他
8 工芸品 III	刀剣
9 書跡 I	国書/漢籍
10 書跡 II	漢籍/和書
11 書跡 III	古文書/古記録/書翰/その他
12 考古	遺跡出土品/その他
13 建造物 I	寺院
14 建造物 II	寺院
15 建造物 III	神社/住宅/城郭/その他
別冊 国宝便覧	国宝の目録/用語解説/和文・英文索引

1 決定版—国宝一〇三三件収録は本全集のみ 2 画期的—
ひとめでわかる、ジャンル別新編 3 特徴的—かつてな
いアングルで大増ページ 4 研究に—文化庁担当官による書
き下ろし解説 5 鑑賞に—実物そのままの格調高いカラー図
版 6 資料に—誰にもひけて、使いやすい国宝便覧

●読者2大特典

1 お買上げの方には、文化勲章
受章彫塑家・北村西望先生制作
豪華オリジナル文鎮「虎視眈眈」
を進呈いたします。

2 重厚で堅牢な専用書架にセッ
トされています。



■送料 日4割 36.4×26.4センチ
各巻カラー平均ページ/総平均ページ
特製布表紙/各巻専用ケース入り
【全巻セット専用書架付】

定 価

145,000円

分割払い定価

155,000円

(10ヵ月10回払い 実質年率14.75%)
●分巻売りはいたしません